

王寺南義務教育学校で防災復興ワークショップ ～小学生が主体的に災害対応を考える～

関西学院大学災害復興制度研究所 主任研究員・准教授

羅 貞 一

2024年11月14日（木）、王寺南義務教育学校（奈良県王寺町）にて、小学5年生130名余りを対象とした防災復興ワークショップが開催された。これは、NPO法人都市災害に備える技術者の会、伊藤東洋雄副理事長が、本研究所のニュースレター（Vol.54）で紹介された防災教育活動に関心を持たれ、地域貢献の一環として同研究所に協力を依頼し実現したものである。羅主任研究員がファシリテーターを務め、子どもたちに防災・復興の大切さを伝えた。

王寺南義務教育学校は、2022年4月に開校したばかりの新しい学校である。小学校と中学校の9年間を一体的に教育する義務教育学校として、1年生から4年生は「太子学舎」、5年生から9年生は「畠田学舎」に分かれて学び、豊かな人間性と社会性を育むことを目指している。今回は畠田学舎の体育館でワークショップが実施された。

小学校5年生、130名という大人数を一人のファシリテーターでまとめ、参加型のワークショップを進行することは容易ではない。小学生にとって、ワークショップやグループワークは慣れないものであり、13ものグループワークを円滑に進めるには、様々な工夫が必要であった。まず、小学生の集中力と興味関心を維持するため、アイスブレイクに十分な時間を割いた。

ワークショップは、まずアイスブレイクから始まった。羅主任研究員は、子どもたちに人気のコンビニについて質問し、コンビニが災害時の「帰宅困難者支援ステーション」としての役割を担っていることを説明。身近な存在であるコンビニが、災害時には重要な拠点となることを、子どもたちは興味深そうに聞いていた。

続いて、「防災じゃんけんゲーム」を実施。これは、地震、火災、津波発生時の安全確保行動を、じゃんけんを通して楽しみながら身体で覚えるゲームである。子どもたちは、グーは「地震」（机の下に隠れる）、チョキは「火事」（口と鼻を手で覆う）、パーは「津波」（高いところに逃げる）と、それぞれの災害と安全確保行動を結びつけ、元気よく体を動かしながら、防災意識を高めていた。

アイスブレイクで緊張がほぐれた後、プロジェクターで災害発生時の状況を映し出し、「その時に、私はどうする？」と問いかけるクイズ形式で、子どもたちに主体的に考えさせるグループワークが行われた。10名程度の13グループに分かれ、各自が考えたことを付箋紙に書き、模造紙に貼りながら、グループ内でお互いに話す。羅主任研究員は各グループを巡回し、子どもたちに積極的に話しかけ、質問を投げかけ、思考を促し

ながら進捗をサポートした。同校の先生方も、グループワークの進行を手伝い、子どもたちの学びを深めるための協力体制が築かれた。



伊藤東洋雄氏は、東日本大震災後の気仙沼市での復興支援経験から、被災状況や仮設住宅の写真を提示し、復興活動を語った。これにより、子どもたちは災害の深刻さを実感し、防災意識を高められたと考えられる。

参加した小学生たちは、非常に活発で、「今、授業中に地震が起きたら、どうする？」という質問に対して、「机の下にもぐる。放送・先生の指示に従う。運動場に逃げる」と、段階的な行動をしっかりと書き出していた。中には、「窓ガラスから離れる」「近くに倒れそうなものがないか確認する」など、より具体的な行動を挙げる児童もいた。文字だけでなく、絵を描いたり、付箋紙をきれいに飾ったりするなど、自由な発想力も見られた。

羅主任研究員は、「子どもたちが楽しみながら防災について学び、災害時にどのように行動すべきか、自ら考え、意見を共有することを目指していた。予想を上回るほど積極的に意見を出し合い、主体的な学習姿勢を示してくれた」と語った。

ワークショップ後には、校長先生と校長室で今後の防災教育について意見交換を行い、6年生になった際の防災教育への継続的な取り組みや学校地域連携事業として地域の防災会の方々と校区内にある「かまどベンチ」を利用した訓練など、具体的な連携についても話し合った。

同研究所は、今後も地域社会に貢献するため、防災教育や啓発活動に積極的に取り組んでいく。今回のワークショップが、子どもたちの防災意識向上の一助となり、地域全体の防災力強化に繋がることを期待したい。



▲王寺南義務教育学校で防災復興ワークショップの様子、2024.11.14